

流し・茶の間

足軽屋敷の玄関に近く、勝手口と直結しているのは、食事の準備に使う部屋と家族で食べる部屋、つまり流しと茶の間です。

流し：

流しとは、足軽（歩兵）の妻が食事の準備やそのほかの台所作業をする場所です。江戸時代（1603—1867）はガスと電気がまだ使われていなかったため、コメはかまどに釜をかけ、燃え盛る薪の炎で調理されました。流しは多くの場合、前庭につながる勝手口を通す形で設けられました。庭から取り込んだ空気によって煙を雲散させ、快適な作業空間を確保できました。家を出入りするのが必要な、洗濯といった雑務をこなすのも楽でした。洗濯は、庭で行われ、乾されました。ここには、入浴に使用された大きな甕も展示されています。

現在の清水家の流しは板の間となっています。しかし、江戸時代の流しは、全体が土間造りだったろうと思われます。

茶の間（食堂）：

茶の間は、主として食堂として使用されていました。家族が集まって一緒に食事しリラックスできる場でした。清水家では、当時使われていたと推測される食器を置いており、当時の様子をより生き生きと再現しています。

江戸時代はそもそも単独の食卓が存在せず、代わりに、「箱膳」と呼ばれる個人用の箱型テーブルが使われました。箱膳は中空で蓋が付いています。食事時には、箱膳上部の蓋の上に食事の皿などが並べられ、食後は、洗われた食器が箱膳内部に格納されます。

江戸時代の典型的な食事は、スープ料理一品、野菜料理一品と、主食のコメで構成されていた。もともと、人々は1日2回の食事（朝と夕方）を取っていましたが、17世紀の終わりごろに1日3食に変化しました。おそらくは経済的繁栄の証だろうと思われます。